

日記

ホームページ作成と共に開始した、日記
つらつらと日々の出来事
自分の価値観を書いてきたとこだけど
その中から、日常的な内容を省き
それなり時間をかけたものを抜粋する
少々書きすぎなんじゃと思いつつ
自分の内面を探ったり
社会情勢を評してみたりと
その日の気分で話題は多岐にのぼる
そんな一部を

自由人 (16.11.1)

目指す生き方「自由人」とはなんぞや？ということ。

世の中自分だけいろいろ考えていると思ったら、もちろんそれは勘違い。みんなそれぞれ悩み考えながら生きているものだし、それを意識するだけで自分の価値観が拡がる場所がある。また、人生で最もいろいろ考えるときは、固定観念ができあがる前の若い頃じゃないかと思ひもする。いろいろな考えを聞いて自分の中で葛藤を繰り返し、答えを導き出そうともがく時だから。結局正解なんかないかもしれないけど、行き着く過程とそこで導き出した答えは、自分を彩る色となる。バカの壁じゃないけど、否定するラインは確かなものを持っておく必要があると思うし。

そんな訳で、この日記では、一人間の日々の生活に織り交ぜ、適度に価値観を挿し添えていく。異なる価値観や行き過ぎた表現は、若気の至りにご容赦いただくこととして。今日のお題は、日記の題名「自由人」。自分の目指す生き方のことを。

自由人とは、「束縛されない生き方をする」ということ。100%自由なんてありえないから、何を優先するかということになる。全体のバランスをとり、自分が優先するものを自由にしていく。大切にしたいのは、「自分の判断・考えを束縛されない」こと。

経験・価値観・他の人の意見・全体のバランス等々から導き出した自分の判断を、他のパワーで影響させない。心がけるは、まずは他のパワーの源をつくらないこと。他のパワーとは、自分を譲らざるを得

ない状況にさせるもので、それを極力除く有効手段は、①人に借りは作らない、②責任は自分で持つ覚悟を決めることにあると思う。

①は、人としての信用を保ちつつ自由であるためには、無用な借りを作らないようにするという。力のある人に物事を頼み解決してもらったり、できることを人に頼んだり。気にしすぎないことももちろん大事だけど、やっぱり相手に引け目を感じるもの。あの時お世話になったしな・・・、これで自分を譲ったことってあるのでは？自分の場合は、返してもらうつもりはないけど、貸しはバンバン作ります。何かあっても楽な気持ちで無理を言えるし、その精神状態でいられるだけで十分な収穫。相手によっては、限度を超える無理を言われる可能性もあるわけで、できるだけ人にその環境を与えたくないから。

そして、②責任は自分で持つ覚悟を決める。自分で責任を持つと一気に裁量が増えるし、自由度が増す。なにせ人の判断を気にせず、自分の考えで動けるわけだから。人任せじゃ人に頼らなきゃいけないし、やりたいことまでできなくなる。やりがいまで全く変わってくる。もちろんそのリスクは大きい。でも、身を引くことまで考えれば、それ以上の責任追及の可能性はなかなかない。とれない責任なら避けるべきだけど、自分のやりたいことなら覚悟も必要だと思う。その気概は周りの人にも伝わり、自由でいられる環境が整っていくもの。

仕事に例えれば分かりやすい。できることは自分で解決。人の頼みは積極的に取り組む。自分の仕事は自分で責任を持つ。上司の意見は聞けども受け入れるかどうかは自分次第。出世じゃなくやりがいが目的なら、上とやりあうのも問題なし。上の人も分かっているもの。責任を取る気概と正論があれば、見守ってくれると経験上思う。

結局自由とは、自分を束縛させる種を作らないこと。法に触れることをしていたら警察に引け目感じるし、人に借り作っていたらその人に逆らえない、会社に一生いて出世を目指すなら上司に反抗できない。どんな場面でも堂々と自分の価値観を引提げ自分を貫き通すのが、自分にとっての自由であり、目指す生き方。そういう生き方の人は好きだし、人に、環境に左右されないことは人としても重要なことだと思う。

当然、「自分は自分」として生きられる環境は、こつこつ作り上げるもの。突然降って沸くものでもないし、周りに受け入れられずにやるのは、単なる社会不適格者に過ぎない。自分に対し自由であるとは難しいけど、常に念頭において行動したいと思う。

H16年有効使用語大賞「でもね」(16.12.15)

人との対応スキルをまとめてみる。

初対面から数回で相手の信頼を得、契約をとる。そんな時ってあるよね。理解を得られない時、どのように納得させ、相手の考えを変えられるか。理不尽なことを言う人に、どのように対応するか。仕事だけじゃなく、いろんなところでそういう場に遭遇すると思う。個人的なその対処法について。

まず相手の言うことはどんな理不尽なことも、いったん全て受け入れる。その上で、一つ一つ正論を持って訂正していく。あなたの答えも正しいけど、こういう風にも考えられないかという具合に。答えを押し付けず提案する形なら、入り口ではねつけられることは、そうない。自分の考えを受け入れてもらった手前、理解しようともしてくれる。それが本質を付いた正論ならば、大概受け入れてもらえる。相手に共感的理解を示せば、仲間意識が生まれ信頼を得ることができる。自分の考えを一方向的に押し付けることでは、理解は得られない。相手の立場で相手に最もメリットがあるであろう答えと方法を考え、提案する。相手に不利な結果でも、こちらが精一杯出した答えなら不思議と伝わるもの。誠意とは言ったものだけど、人間同士行きつくところはそこだと思う。

不平不満を言う人をなだめるのは得意。うん、うん、うん、うんという相槌から入り、そう、あなたの言うことももつとも。こんな例もあるしそれは確かにそうですね、とこちらに負担がかからない方向で

共感的理解。「でもね」、これがキーワード。ここから畳み掛けます。こういう風にも考えられるし、こういう見方もできますよね。と相手の共感を求める。相手が譲らない点がたいした問題じゃないなら、それは否定せずそのままにする。絶対に譲れない肝心なところをこちらの考える方向にもっていく。何かに固執する人って少しずれた点にこだわるので、このやり方が通じる。本質を突く人は十分理解した上でのことなので、論理的な説明で通じる。それぞれタイプを見極め、柔軟に対応することが重要。

相手の立場で自分の裁量内で可能な限りのベストな答えを導き出す。相手の気持ちを受け入れ、導き出した答えを受け入れてもらえるよう説明する。アフターサービスを含め、精一杯対応する。ここにいきつくと思うけど。

生き方を考える (17.1.5)

イラクで先日亡くなられた戦争記者橋田さんが番組で取り上げられていて、その遺言ともいえる本の中で出てくる一文が紹介される。「ときどき楽しいことがあるから、ぜひ生きのびてほしい」。

これ、人生の本質だと思う。二十数年と生きてきたら、自分が何ができ、何ができないかも見えてくる。歴史書に出てくるような偉大なことはできそうにないし、じゃあ一体この世での自分の存在意義はなんなんだなんて考えたりする。

でも結論は、何もないのよね。世間のじいちゃん、ばあちゃん達が、いい顔して毎日楽しそうに過ごしているように、みんなただ日々を一生懸命生き、年月がすぎていく。人生の結果、たまたまそれが取り上げられるかどうかだけ。そんな日々の生活で出会う楽しいこと。それだけでも生き続ける価値あるよってことがいいんだと思う。生死を常に意識し続けた人の、このシンプルな結論がいいなど。

彼は、多くの映像を残している。それは、戦争という現実を仮想体験させてくれるこれ以上ない教材だ。特集でもいい、もっと目に触れる機会を作るべきではないかと思う。彼の出身地山口県で積極的に取り組み、その意思が後生に引き継がれることを望む。

本の詩紹介が、ついつい教育論まで (17.2.27)

昨日から読み始めた「花神」で、とある詩に出会う。主人公は、戊辰戦争を指揮した軍略家大村益次郎で、彼の本業は医者。前半は若い頃の医学修行を通じた彼の人格・人間形成過程の話で、その時期のことをまずは紹介。

周防国吉敷郡鑄銭司で村医の子として生まれの大村は、16の頃防府市宮市の開業医で梅田幽斎の内弟子となり医者見習いとなる。医書は漢文がわからないと本が読めないから、まず漢学の先生につくことという幽斎の進めで、19歳の時豊後(大分県)日田で塾を開く広瀬淡窓の門に入る。当時医者とは百姓身分で世間の扱いは低い。士分なら藩府萩にある藩校に入ることができるが、百姓身分のためそれが許されない。が、その方がよかったのかもしれないという。

「師としてあおぐのには、天下一流の学匠に限る」とは最初の師幽斎の考え。一流の学匠のもとには一流の門弟が集まっている、互いに成長を助け合うから、当方に能さえあれば自然に大医になれるのだという。ちなみに、後に大坂の緒方洪庵の適塾に入ることを進めたのも、この幽斎。

話を少し戻し、広瀬淡窓の塾について。淡窓の塾があった豊後日田は、内陸の盆地で筑後川の上流にあり山里といった感じ。淡窓はのち天下の大儒とされたが、江戸にも京にも出ず、日田の山里で学塾を開き門人を教え、門人は60余州から集まり、75年の生涯で4千人に及ぶ天下に類の見ない大塾であったという。

ここから本題。塾の寄宿舎で寄宿生達は、飯を炊くのにも薪を取りに行かねばならず、こういう生活が生涯の思い出になると淡窓は門生に常に言い、門生たちの共同生活の光景を詩によむ。

「道（い）ふを休（や）めよ、他郷苦辛多しと 同袍（どうほう）友あり自ら相親しむ 柴扉（さいひ）暁に出づれば霜雪のごとし 君は川流（せんりゅう）を汲め我は薪を拾わん」

約せば、「故郷を離れて苦労が多いと弱音を吐くな。ひとつの綿入れを着回した仲間がいるじゃないか。朝早く柴の粗末な扉を開けて外に出れば、霜が雪のように光っている。さあ、君は川へ行って水を汲んでこい、私は裏山で薪を拾ってこよう」というもの。仲間と共に前を向いて頑張ろうといった感じの情景が目に浮かぶ。この詩の「君は川流を汲め 我は薪を拾わん」というこの部分に強烈な懐かしさを感じる。

この言葉に出会ったのは、小学校4年の時。4月始業式を終え、新しい教室へ入った時の黒板に書かれていた言葉。当時の担任は、大学卒業後自分のやりたいことをと新たに通信制で教員免許を取得し、小学校教員として初めて着任した先生だった。今までにはないチャレンジ精神旺盛な先生で、普段の授業にも一つ一つ工夫をいれていた。

社会科では新聞形式により自分で勉強した内容をまとめ発表を行い、国語では詩が好きだということから多くの詩が授業で登場した。詩を解説しその情景を想像する授業は、今考えてもなかなか粋だ。感想文など意味がないと全く授業で教えることがなかった。大学ではこういうことをすると小論文の書き方、つまり起承転結での文章の書き

方を習い、国語の教科書に載る「ごん狐」を題材とし、原稿用紙10枚近くの作文を書いたりもした。

百人一首が好きで、週一の自由に使える時間（今で言う総合学習みたいな時間か）は常にクラスで百人一首大会。横綱1名、大関2名、関脇・小結・前頭何枚目と教室の後ろに張り出され、大会後順位が入れ替わる。何首覚えたかという周りとの競争と、大会で上位に行きたいという思いで百首全て覚えたもの。もう一踏ん張りがないから、大関に一度なるも常に関脇辺りに位置していたのは、変わらない資質。算数で習った立方体の書き方は、その後今でも役に立つ。土曜午後の補修なんて楽しみで参加していた。根気帳なるノートをつくり、勉強していたことが懐かしい。米作りをしようなんて提案は、うちの代じゃ実現しなかったな。遠足以外で休みの日にクラスで集まり、山登りしたというのはこの時を除いて経験なし。学芸会じゃ秋に各クラスで劇をやるんだけど、夏前から生徒が台本を書き始め夏休み集まって練習に励んだもの。あの時エンディングで流れた曲は、いまでも思い出の一曲となっている。

チャレンジランキングという、全国の小学校が、各競技の記録更新を目指し雑誌に載るという企画があった。例えば空き缶積み重ねとかそんな内容だけど、これもいろいろなものに挑戦し、皆で一体となる喜びを知った。毎朝教室に入る前にクイズが出されていて、教室内の黒板に答えが書かれているというイベントは、毎日学校に行く楽しみになった。

マイペースで目立たずむしろ引っ込み思案の3年間もこの先生と

出会ったことで大きく変わった。授業で間違えることは当たり前、自分の考えを言うことが大事という意識が共有され、授業中はとにかく手を挙げ発表することが当然の風景だった。先生に今日は調子がいいなといわれたくて、手を挙げ続けたことを思い出す。右手で字を書き、手は左手であげろという教えは、今も体に染み付いた習慣。クラス全体を巻き込むその手法で、クラスのまとまりもすごかった。

そういう風潮があったから、4年3学期にそれまで経験のなかった学級委員長に立候補した。彼でいいと思う人は拍手と先生が言った後の一瞬の間は、前が見られず泣きそうになった瞬間だったと思い出す。学年のリーダー的な集まりにも推薦してもらい、中学校が終わるまで毎年学級委員長とそれなりの活動をしたのも、これが契機だった。生き生きしていたと評されるように、学校に行くのが楽しくてしょうがなかった。

教育とは何かを考えた時、常に思うのはこの時に受けた教育。これが理想だと思し、ここから自分が変わったという実感があるから。中学生になった時、当時のクラスメートが、学年で男女10人の学級委員長のうち8割を占めたのはその現われだと感じたもの。点数をとる勉強じゃなく物事から学ぶ勉強、そしてリーダーシップ、人格形成、チャレンジする心を教えてもらった。

今その先生は、下関で先生を続けている。年にして43歳くらいかな？学年主任など任されなかなか思うようにいかないともあるみたいで、就職時手紙書いた時、今は昔のようにいかないよという弱気な言葉も聞かれたけど、先生を求める子供は大勢います、あの時の気

概で頑張ってくださいねとここでエールを送っておく。

埋もれている能力を掘り起こす、教育にはその役割もあるし、生徒にとっては出会った先生しだいなんだから、教育の重要性はその面からもいえると思う。小学校が荒れるのは、家庭の躰と共に学校の教師の質にもある。教育は人材を育てるため最も力を入れる必要のあるところで、江戸期から1級の人材があてられてきた。特にどの色にも染まる小さな頃は、人格形成を担う時だから愛情の中にある厳しさが求められてきた。今の教師はどうなのか？小学校教員といえば、教育学部卒業が中心。進学時、大学で教育学部を選択する人材にどれほどの人がいるのか。教員免許がなきゃ教師ができない、その制度は本当に正しいのか。ルーティン化した教育、情熱を感じさせない対応、自分の時代でもそういう感じを受けた先生はいた。就職の手段として教師が選ばれる今日、もっと根本的なところから見直す必要があると思う。

小学校教員の女性比率は6割を超えている。どう感じるかはそれぞれだけど、男が選ばない、やりたくても選べず既に入力で蓋がされているこの状況が、今起きる問題の本質であるような気がしてならない。人に教えるための知識、教育心理学、それは分かるが、全てではない。学校という小さな枠で物事を考える人間にならないよう、臨時でも外の人間をいれ権限を与え教育することも重要だろう。周りに縛られていないからこそできることは多くあり、それが今の諸問題の解決策になるのではと思う。学校という小さな社会の死守に精を出す教師にどれ程の度量があるかは疑問だが、共通の目標に向かい変革が行われることを期待する。突然校長という権限を与えるだけではなく、理解あ

るトップがまとめ役となり融合を図ることも一つの方法だろう。

最後に大村益次郎が習った、緒方洪庵の適塾の名前の由来を紹介。蘭学を基礎とし西洋医学を学ぶ塾だったが、世が開明期であるために、蘭学を学んでも必ずしも医者になる必要はないというのが洪庵の塾の方針だった。適塾というのは、洪庵の号である適々斎からきたものだが、一つには字義のとおり、「門生をしてその適する方におもむかしむる」という塾風があったからという。大村益次郎や福沢諭吉、橋本左内と医術を学んで思わぬ方向に行ってしまったのもその塾風からではないかと思う。

教育とは何かを問われれば、専門を絞る大学までの過程は、自分を見極め適する方向を見出すための時期といえる。見極めた時自由に動けるよう基礎学力を身に付けるという面から今の教育方針に不満はないが、一方、見出すため、適所を伸ばすため、人間としての能力育成のためという面から見た時、現状には多くの問題を感じる。

学校がおろそかにされ、塾が奨励される風潮は、基礎学力面での機能さえ否定されているからだろう。教育が今後どの方向を向くべきか、それは日本の未来を担う人材育成という共通目標を認識した上、変化を受け入れ柔軟に対応していくことが望まれる。

バランス型人間 (17.3.7)

幕末の長州藩を扱う司馬遼太郎著「花神」の中から。桂小五郎の評価を紹介。

「桂という男は、全体が一個の天秤のような男らしい。桂には、特別の政見や、魔術的な政治的才能があったわけではない。魔術的政治才能という点では高杉晋作が日本史上類の少ない天才であったし、また政治における処理能力では井上聞多の方が優れていた。桂にあるのは、天秤の感覚だけである。

桂は天秤における支点そのものであった。桂の感覚における支点の左右が常に細かく震えていて、少しでも左が重くなると、そっと右に分銅を置いて釣合いをとろうという働きをする。天秤が無私であるように、こういう感覚の持ち主は、常に無私でなければならない。

「わしの議論を聞け」といって腕まくりするようなところは、桂は年少の頃からなかった。常に困ったような表情をして、人の議論を傾聴する側であった。このため桂は賢なのか愚なのか、門人の長所を指摘することについてはきわめて情熱的だった吉田松陰さえ、桂に対しては、ほとんど語っていない。語りにくい存在だったのであろう。そのくせ松陰は、桂を信頼することが厚かった。その理由は、桂は誰よりも口が堅かったし、そのうえ、天性のものらしいが、優しさがあった。天秤は本来、優しいものであろう。

桂の天秤を激しく傾斜させるような過激無謀な壮士が、この藩には多かった。この時期までに彼らの多くは非業に倒れたが、そういう連中が過激無謀のプランを桂の元に持ってきても、桂は三割方肩入れし

てやった。しかし後の七割は捨てた。捨てるのも露骨に捨てず、そっと反対側の分銅を増やして天秤を水平に戻すという作業をした。

その連中の中には、桂さんは冷たいという者もあったが、かといって桂を憎むものはいなかった。本来桂が無私だったからであろう。また桂は、天秤であるがために、他人の能力がよく見えた。だから藩の誰もが置き捨てていた大村益次郎を藩の重要機関に推挙し、それに誰も異論を挟まなかったのだ」

この天秤という感覚は、いまでいうバランス感覚をさすのだろう。単に人と人との調整能力だけでなく、思想や人間性まで含めたバランスが求められる。それには全体を理解した上で、バランスとなる支点を自身で見出し持たなければならない。つまり誰もが仕方ないと納得する点で、そこに私心が入る余地はないし、無私だからこそ皆を納得させることができる。

バランスの調整の仕方は、この表現に尽きるだろう。「バランスを崩すような過激なプランにも桂は三割方肩入れしてやった。しかし後の七割は捨てた。捨てるのも露骨に捨てず、そっと反対側の分銅を増やして天秤を水平に戻すという作業をした」という。

人というものは、自分と異なる考えを受け入れようとしない、つまりは聞きもせず拒絶するところがある。この辺は養老孟司の「バカの壁」を読むと機微が分かるが、人間の脳とはそういうところがある。相手を納得させるには、主張を戦わせない、まず相手を受け入れること。その上で、相手の主張を活かしながら支点へと考えの本質を移動させる。で最終的に、確かにそうともいえるねと支点で納得させる。

支点を見抜くことが、その人の能力であり信頼へとつながるところであろうが、単純にいえば誰にも公平な点というところか。

強烈なリーダーシップとは正反対の能力で、政治家で例えれば中曽根氏がリーダーシップを発揮するリーダーだとすれば、バランス型とは故小淵氏をさすのだろう。バランス型のリーダーとは、形は能力のある人を起用し権限を与え活躍させるが、実質は自分の持つ視点の具現者をコントロールし、結果として自分の描く形を作り上げることを指す。無私だからこそ人の能力もよく見えるし、それを活かそうと思う。不思議なもので、自分の手柄だとか儲けだとか私心が出たとき、このバランスはもろくも崩れ、全体を見下ろす視点が針の穴のような小ささとなり、客観的とは程遠い状況となる。

どのリーダーがいいなんて、人それぞれの価値観が異なるように一概には言えないし、当然状況にもよることなので、断定する気はない。ただ個人的にバランス型人間なんで、その目指すところをこの本で見つけたから一つの表現として紹介。桂小五郎にしろ、坂本竜馬にしろ、バランス型人間だと思うから好きになる。

前に紹介した、人を説得する時に使う「でもね」もつまるところ同じこと。相手の考えを受け入れた上、でもねと落とし所（支点）へと少しずつ修正し、最終的に納得してもらおう。上から偉そうに言われたら、自分が悪いと気付いても意地になって絶対に譲らない。ここは譲ってあげようとする立場からの逃げ道があれば、人は寛容になるもの。自分が悪者になる等譲り易い空気を作るのは、そのテクニックだろうけど。もちろん視点がずれていたらお話にならないが。

自分がそうだから、どうすれば相手が納得するかよく分かる。相手

の気持ちにシンクロさせ、それを必要以上にカバーすることで人との調整はうまくいくことが多い。こんなことを意識せずにやるから、それなりにパワーを使い、普段は人付き合いを避け一人でいようとする。仕事だけみればなかなか上手にやっているが、結果プライベート社会不適格者に陥っているからな。せめて普段は、気を使わずにのんびりいきたくて。

「世に棲む日々」から、吉田松陰について (17.3.7)

人に対する他の人からの評価は、基本受け入れない。それぞれ相性があるように、人が他人を評する時、主観が主となる場合が多いからだ。長所を聞く時、他人の評価が当てはまることが多い。それは、嫉妬等囚われやすい感情的なフィルターがなくなり、客観的に判断するためだろう。

基本自分は、客観的な人の批評はするが、主観的な悪口は言わないようにしている。大概どこかで本人に通じ、無用な恨みをかうから。また、他人の悪口を聞かされたときは、まず受け止めそれとなくフォローしているつもりだ。自分がその人の良いところを知っているなら、特にそう。一方から見たら欠点でも、違う方面から見たらその人の魅力であることも多いから。

自分も同じ思いなら別だが、自分の思いを変えてまで人の悪口にあわせることは絶対がない。陰で非難されることは、自分がやられて一番嫌だし、思いもなくそれに便乗する人も嫌いだからだ。自分が嫌いでない人が一同の非難にさらされたら、俺はそう思わないよって風穴を開ける。嫌いな人はもちろんいる。でも自分の思いに人を巻き込まないというのは、昔からの信念。きっと多くの人が、自分が誰を嫌いかなんて気付いてないと思う。

嫌い=合わないだと思いが、基本合わない人とは関わらない主義。無駄に関われば、不要な不快感が生ずるだけ。いじめの原因が、不要な深い人間関係を迫及するところにあるとは自分の結論。いじめられる方にも原因があるとは、それほど身勝手な理屈はないと軽蔑する表

現。不快を乗り越え付き合うほどの人格が形成されていないなら、関わるべきではない。表面だけの付き合いが大人の社会では成り立っているのだから。各個の人格の尊重と集団規律の維持は、必要に応じ使い分けるべきで、それが社会であり、それを教えるのが教育だと思っている。

自分が嫌いな人は、相手も嫌っているとよく言うが、それはあるだろう。少なくとも、好んでいないということで。合わない人と無理に合わせるようなことは、昔にやめた。自然そっけないから、素直に伝わりるところが多いだろう。別にそれはそれで、支障がなく問題ないし、世の中そんなものだと思っている。関わらないならまだしも、攻撃されたら、話は別。徹底的に嫌い、全力で相手を倒しに行く。そういう無駄なことをしたくないから、人間関係はなるべく希薄にしているところがある。本当にお互い尊敬しあえるような仲間と深く濃い関係を作っていくことを自分は求めている。

評判と実質が異なることは史上の人物でも当然あり、こと結果のみ知る偉人に対してはそういう面を認めない。「世に棲む日日」を読みつつ、吉田松陰に対し誤解していた部分が多く、彼の一面から彼を判断していたことに反省する。やはり例え史上の人であっても、ある程度の判断材料を持って自分で評価しなくちゃいけないね。で、彼の思想を一部紹介してみようと思う。

吉田松陰は、明るく楽天的な人だったという。どうも悲壮感漂う思想という認識があり、まずこれが第一の誤解。人物紹介はさておき、彼の残した言葉から松蔭という人間を想像してもらえれば。

・18歳の時書いた藩の学制改革に伴う意見書の中から。「年若の者にはあまり世間の仕事をやらせてはならない。父母の事情が許す限り、勉学専一に励ませるべきである」世俗の仕事をあまりに若い頃からやらせすぎると人間が小さくしか成長しないということだろう。仕事などいずれやらなければならないもの、若い時の時間は他に使い道があると自分も思う。学生時代アルバイトに勤しむ気にはならなかった。もちろん親の援助が必要となるが、そのため得られたことは大いにあったと今でも思う。

・「大器を作るには急ぐべからざること」松蔭の生涯の持説で、「速成では大きな人物はできない。大器は晩く成る」という。

・松蔭19歳の時、兵学寮（学部）の教授の一人であったが、この時の兵学寮掟書という学校規則から。「年齢の上の者に対しては礼儀を守れ、後輩には親切に導け、他人には寛容であれ、意見があれば遠慮なくいえ……これらの掟を守らぬについては師弟の縁もそれまでである」

・藩主毛利慶親の御前で講じた人材登用法から。「人には得手と不得手がある。英雄にも愚者にもそれがある。それを見抜いて人の得手を用いるが良い。また人には必ず嫌なところがある。例えば残忍、欲深というのは人の嫌がる場所であるが、そういう人物ですら長所があり、それを親切に見てやらねばならない」

・「古語にもいう、庸謹の士は得やすく、奇傑の士は得がたしと。平凡で実直な人間というのはいくらでもいる。しかし事に臨んで大事を断ずる人物は容易に求めがたい。人のわずかな欠陥をあげつらうようでは大才の士を求めることができない。」「大事には、大人物を用いよ。

小事には、小人物をあてよ。それが適材適所というものである」

吉田松陰について少し紹介。彼は杉家の2男として生まれるが、幼い頃吉田家の養嗣子になる。養父吉田大助が松蔭が五歳の時病死したため幼少ながら当主になり、生家の杉家で養育されることになる。

吉田家は代々藩制による山鹿流兵学師範を務める家で、将来その家学を継ぐことは決まったこと。藩は、大助が早死し家学が断絶することを恐れ、藩命で吉田大助の高弟に対し松蔭の後見を命ず。これにより松蔭5歳の時から様々な人が教師となり、教育を行った。8歳で藩校明倫館で教授見習をしているが、これも吉田家の実学が山鹿流兵学であるための封建的慣習で、当主がいかにかに幼くても教授見習という座につかなければならないことからきている。名目だけでなく、9歳から実際に明倫館で講義をしている。自分の講義を充実させるため、官設家庭教師の家をまわりながら講義ノートを作り懸命に学んだという。

年若くして講義を行っていたことが秀才の証ではない。それは与えられた家柄と、藩ぐるみの環境で作られた結果ともいえる。ただそれをこなし、実際に講義を行い、18歳にして膨大な意見書を作成したことは紛れもない事実で、与えられた環境だけでないことの説明は不要だろう。同世代の秀才達から、特別な大人物どころか、小さな男だと見られていたことは、後々若い世代から大いにあがめられた関係とのギャップがありおもしろい。

ただ、彼の価値観は好き。現実を踏襲しつつ出す考え方に好感を持つ。抗議でも嘆願でもなく、物事を根こそぎに説明して相手の意識を

変えてしまうというその説明方法に、思わず納得する。自分への厳しさなんて到底及ばないし、その行動力は尊敬に値するなとつくづく感心しながら、読み進める。ただいま脱藩の罪で家禄を没収され、諸国（藩外）で修行中の身に。ペリー黒船も後5ヵ月後にはくるのかな。また、何かおもしろい話があれば紹介することとしますかな。

生き方への葛藤（17.6.4）

いろいろ思いはあるけど、手当たり次第に動こうとは思わない。自分の体は一つだし、やるなら中途半端に終えたくないから。一度始めたら、それを終える前に次に移るようなことはしたくない。自分一人のことならまだしも、周りを巻き込み勝手な行動をすることは性分に合わない。どこまでも責任取るのが、筋だと思うから。

だから、興味のあまりないことに中途半端に手を出し物事を始めることは意識的に避けている。いつでもその機会が来たときに、対応できるように。自分が思い描くものに近い、これぞって役割が回ってきた時に全てをかけて取り組もうと考えている。今はその準備段階なんだと思うようにしている。

でもその見極めは、きわめて困難。本当にその機会がくるのか、何もなまま終わらんんじゃないのか、こだわらず範囲を広げいろいろなことに取り組むべきじゃないのかと、何もなまま数年が過ぎる現実には葛藤も多い。

この背景が、幕末の長岡藩士河井継之助の言葉に共感したことにつながる。準備は怠らず、その機会がこずに何もなさずに人生が終われば、ただそれだけのことで、その覚悟を持たずにいるのは大した人物ではないという。自分の葛藤を見透かされたような衝撃を受けた。以下抜粋。

「大事ができるよう準備をするが、必要とされなければ、酔生夢死だ。為すこともなくこの世に生き、そして死んでゆく、その覚悟だけはできている。この覚悟のないやつは、大した男ではない」

人を押しつけ自分の思い通りにことを成すタイプではない。絶対にやりたいことは主張するし、そのための間接的な活動はするけど、それは機会を与えられるための種まき。地位と役割を与えられてこそ、能力を発揮できる。無理矢理手に入れたポジションで活躍できるタイプじゃない。自分の考えを実現するには、個で足りない点を補うため、一緒に動く者の心をつかみ、同じ方向を向かせる必要がある。

求められる前に、派閥等による強権を発動し無理に地位を手に入れたとしても、その後の活動などたかがしれている。そんな人間を周囲が信頼するとも思えないし、チームがまとまることはないと思う。目的を実現することを第一と考えるなら、たとえ機会が遅れようとも待つべきだと考える。

与えられた強みがあるからこそ、自己主張も可能だし、人を動かすこともできる。役割に対する責任があるから、それを実現するためなんでもできる。自分がやりたいことの役割が与えられた時、他の仕事の時と何が違うのか。この辺の機微を、再び「峠」から、長岡藩士河井継之助の言葉で引用する。

「物事をなそうとする時必要なことは、意見じゃなく覚悟だ。やるかやらないか。やるなら、節義のために欣然屍を戦野に曝すまで最後までやりぬくか、そういう覚悟の問題であり、それが決まってから政略、戦略が出てくる。政略や戦略は枝葉のことで、覚悟がなによりも必要だ」

覚悟を持ってこそ物事に取り組めるとは、本質。学者（理論家）が経営をできないように、それをもつかどうか成果に直結する。

全てを投げ打つ価値のある役割を得ること、覚悟を持つに値する機

会がくること、そのための種まきの状況が今なんだとね。まあ、現実
は仕事じゃ思うような分野に携われないし、実践で役立つ能力を磨く
ような自分の描く成長路線はちっともたどっていない。何をすべき
かさえ、ぐらつき始めたこの頃。

使ってくれば結構やると思うんだけどさ、人事の評価もよく分か
らんし、なんか行き詰まり気味で。まあ思いを描いて入社6年目、相
変わらず自分の仕事の可能性に期待はしているんだけど、現実との乖
離にね。さてさて、気持ちだけは萎えないように取り組んでいきまし
ょうかな。

インド人判事意見書紹介 (17.6.26)

前に靖国神社についての考えを書いた時に、軽く紹介したインド人
判事の意見書。産経新聞に関連記事が載っていたから、紹介する。詳
しい内容を書いていなかったから、ちょうどいい機会だと。

書く前に自分の考えを記しておく。これは一つの価値観であり、そ
れはそれで参考にすべきこと。史実の一つではあるが、それ以上でも
以下でもない。これを基に、裁判の結果を覆すなど言語道断、ただ素
直に受け入れるべし。

ただその価値は大きい。「歴史とは、100年たつてはじめて評価
することができる」との表現もあるよう、その時代の様々な思惑が入
った状況で出す結果にどれほどの正当性があるのかという考えを示
したものだからだ。直接利害関係にない立場だから示せた面もあるだ
ろうが、それが戦勝国側であったことは意義がある。

政治犯に死罪はないとは、かつての国際法だったと聞く。政治犯と
は、時代により英雄にも犯罪者にもなるもので、その一時の時代では
判断できないものだからだろう。それを法制化することで、闇雲な断
罪を防いだと考えられる。

その時代の勝者が裁く結果に、古今どれほどの意味があるのか、過
去の歴史を鑑み冷静に判断する必要がある。織田信長が英雄なのか、
明智光秀が悪者なのか、高杉晋作が正しいのか、西郷隆盛が英雄なの
か、河井継之助が悪者なのか、ナポレオンが英雄なのか、ビスマルク
が悪者なのか、そして今裁かれようとしているフセインが悪者なのか。

独裁により犯した罪に対し、裁きを加える。ホロコースト等人権侵

害を抜きにし、領土拡張戦争のみに焦点を当てた時、ヒトラーに何の罪を問えるのか。ポルポトはあまりフォローしたくないけど、これさえ一時の感情に支配されず、客観的に判断する必要がある。

養う人民を守るため、受け継いだ血を継続するため、自国民の未来繁栄のため、数多の戦いが行われてきた。人に植え付けられた遺伝子のように、世界中でそれが繰り返されてきた。敗者だけが多くの犠牲をだした訳ではない、賛美された勝者の歴史に幾万の犠牲があったことを認識する必要がある。そして、それが安定した世界を築くために必要なことだったということも。

戦争=悪という今の価値観で、その一時の感情で、歴史を判断してはいけないとは、何度も述べてきたこと。とにかく今は、近・現代史において、教訓的側面がないがしろにされ、感情的な一部分を政治的に利用されすぎており、それが当然のように世間にとられていることがどうにも解せない。歴史とは、未来への教訓であって、良し悪しを断ずることではないはずだ。鎌倉、室町、安土・桃山、江戸時代のように、その歴史が一つの事象として捉えられる日がくることを、その認識の下世界で共有される日が来ることを、切に願うところである。

もう前置きが長すぎ、大いに反省。だって言葉選び一つ間違えただけで、リスクが大きすぎる分野だから。感情論で判断するのは楽、でもそれじゃ何も解決しないから、国家というものがあり、それらをひっくるめて受け入れ、この社会が成り立っている。

最終的に、戦争とは国家が起こすものじゃなく、国家の背景となる国民の大多数の流れで起こるもの。だから国家は絶対に国民を煽っち

やだめなのよ。ナショナリズムという国家の引き締めが起こす効果は、いつしか止められない流れになって、結局自分の首を絞めることとなる。

韓国が、大統領自ら感情論で歴史を政治に用いることは、だから許せない。彼は、その功罪を分かっていない。一時の政権維持で使うようなそんな安物じゃなく、関係国の将来にリスクを負わせるものだということを分かってほしい。

中国も、体制維持に必要な国民誘導の道具なんてそんな低レベルな気持ちで使わないでほしい。経済的に日本はつながりが必要な国だから友好をという指導者の言葉は、聞いていて泣けてくる。戦争からは何も生まれないとは、お互い気付いたことじゃないのか。この3国の今の繁栄は、お互い適度な距離を保ち、感情論に立ち入らなかった結果。帝政主義の一世代前の世界じゃあるまいし、上下関係じゃなく、お互い一独立国として、尊重しあえばいいじゃないか。

日本が、過去の戦争を政治の道具に使うなど、言語道断。過去の結果を受け入れ、それを教訓とした未来への方向性を示すことだけに専念すればいい。敗者だからこそできる、結果に酔わない、多様な価値観でその経緯を比較し、将来の判断の材料とするべき。一時の感情的な批判に左右されず、断固たる意思を持ち、それを貫けばいい。二度と同じ判断に行き着かないよう過去を忘れないため、家族を国民を守るため命を捧げた人々への追悼のために、真摯な気持ちでそれを態度で表せばいい。過去は切り捨てるものじゃなく、受け入れ、成長させるものだから。相手の気持ちを察して、それを汲み取り、それでも示すところは誠意を持って示す、それが日本人にはできるはず。

国内での茶化しあいはいよいよ、国内で無用に煽ってどうするの。本質がどこにあるのか、それを諸外国に示すのは、政府だけじゃない、マスコミも国民も、皆に課せられた役割のはずよね。自分のためじゃない、日本の、アジアの未来のために自分が何ができるのか。世界観を持って、今の日本を将来の日本につないでほしいと心から願っているんだけどね。

いかん、もう本題に入る。東京裁判で、全被告の無罪を主張したインド代表判事、ラダビノード・パール博士の業績を称え、顕彰碑が建立されたというニュースから。

パール博士は、東京裁判の11人の判事中、唯一の国際法学者で、同裁判の実態を「戦勝国が復讐の欲望を満たすために法的手続きを踏んでいるような振りをしている」と批判。米軍による原爆投下などにも触れた上、判決で「A級戦犯」とされた東条英機元首相らを含む全員の無罪を主張した（パール判決）。そして、「時が熱狂と偏見をやわらげた暁には・・・過去の賞罰の多くに、そのところを変えることを要求するであろう」と予言したというもの。

戦勝に酔ったあの当時の裁判で、このような考えが示されたことは特筆すべき。歴史が検証されていく過程で、彼の思いをどうとらえたか、まあその結論は学者先生にお任せしよう。ただ、これをとらえて過去を覆そうとすることは、くどくど前述したとおり全くお門違いとは、更に付け加えておく。

同じようなことが世界で起きた時、その結果に対しどう判断するか。例え憎まれ役になっても、それを経験した日本だから発言できること

があるはず。あれから60年たち世界にその風潮がまだ残る中、その役割が果たせないなら、この意見書にことさら価値を見出す必要性を感じないのだが。

夫婦のあり方 (17.8.13)

最近結婚される方も周りに多く。昨日の日経新聞で、夫婦のゆくえという記事を見つけたので、紹介。

団塊世代の定年は、夫婦のあり方や夫の生き方に転換をもたらす。長い時を過ごす夫婦は波風を乗り越える知恵も必要になる。男と女の問題を描く作家・高樹のぶ子氏に聞いた、彼女の考え。

―今後、夫婦や男女の関係にどのような変化が生まれると見るか。

「仕事に忙殺されてきた団塊の世代の夫たちは欲求不満になっているので、定年を機に、稼いだお金を一気に自分のために使い始めるのではないかと。妻には悪いけど、定年後の二十年、自分流で好きなことをやらせてもらうよと。先人の『老いのたしなみ』には従わず、ジーンズはいてバックパックを背負ってどこかに行くなど新しい『老いのモデル』を構築する人々が出てくる」

「六十歳を超えてからの恋愛もあり得る。若い頃の結婚前の恋愛が第一次、四十～五十代の世に言う不倫型の恋が第二次とすれば、六十歳を超えてからは第三次の恋愛期になる。」

―六十歳を超えてからの結婚を「夕焼け婚」と名付けているが。

「それまで結婚とは無縁でシングルできた男女も、人生八十年で、定年後も二十年近くが残っていると思えば何かを考えるだろう。出産などとは関係なく、新しい相手を見つけ結婚する。外見も最近はみんな若いし、昔の六十歳ではない。離婚や死別でシングルとなった人たちも加わる可能性がある。夕焼け婚ができるのはすなわち、男であり、女であることを捨てていないこと。人生の勝者だと思う。」

―離婚は昔と比べ高水準となっている。夫も妻も揺れているようだ。

「夫婦は様々なトラブルに遭遇する。そこで問題となるのは結局、人間とはいかなるものかという理解力だ。恋愛して結婚したばかりの頃は互いに理想、妄想の世界に生きている。その後に、理解できないことを相手に発見すると、とたんに食い違いが生じ、関係がぎくしゃくする。だが、それを機会に人間は単純ではない、複雑な側面を持つものだとして学び、伴侶には知らない面もあったのだと受け入れる柔軟性があれば、関係は続く。もちろん暴力亭主などは論外で、ケース・バイ・ケースだが。」

「夫婦以外の異性に心を惹かれてしまう問題もある。これは人間の生理として当たり前という理解がないと、大騒ぎになる。結婚したら、もう他人には感情が動かないということはある程度あり得ない。肝心なのはその後の処理だ。きちんと自分を説明できるかどうか、説明力が問われる」

「私の場合は、夫から『別の女性が好きになった。別れてくれ』といわれるまでは、夫の心は100%私のものだと信じ、余計な妄想とか心配は一切、しないことにしている。それが夫婦にとって一番賢明だと思う。本当に行き詰るまではお互いに一人で悩めばいい。これは自分の離婚・再婚を通じて得た考え方でもある」

―夫婦関係を保つには知的な操作も必要と指摘しているが。

「夫婦は安定したまま放置されると、セクシーでない状況になる。男と女であることに無自覚だと、いつの間にか腐ってしまう。人間は怖い存在だ。だから時々、二人の距離を動かして互いを意識させることが大事になる。一人旅をしてみるとか、妻が突然韓流スターに熱をあげ

るとか。距離を変えて刺激を与えることが関係を長続きさせる」

彼女の意見に共感するところ多く、取り上げたもの。恋愛中には見えない、結婚という縛りができたからこそ出てくる・気付く部分も多くあると思う。一緒にいることが生活の一部となった時、何気ないことが、まあいいよなんて見過ごせない問題に変わっているかもしれない。

でも、忘れちゃいけないのは、相手は自分と違う価値観を持った、一人の人格を持った人間だということ。相手を受け入れる柔軟性をとは、その手段よね。

一時の盛り上がりがないきゃ始まらないことだろうけど、その人の本質を見抜き冷静に判断することも大事。人として見た時、この人とずっといて生活できるだろうか。変わらず夫婦仲のいい、50過ぎのおばちゃんがよく言っていたセリフが好き。「今がどうだとかいいようはあるけど、あの時は私も旦那に惚れて結婚したんだから、そんなこといってもしょうがない」と。そんな照れ隠しみたいなこといって、休みは一緒に出かけ、千葉への旦那の転勤にもついて行ってだし、ほほえましい方で。

でも、その気持ちはすごい大切と思う。惚れて一緒になった相手を、例え年月を経ているいろいろ変わってようが、それをこき下ろすのは、聞くに堪えん。そんな相手を選んだのは自分なんだからって、そういう意識があれば、自ずと普段の行動から違ってくると思うけど。まあ、この辺の責任自己本位的な考えは、相手に備わっているかどうかだから、見極めの話かも知れないけど。

「夫から別れを切り出されるまで、夫の心は100%私のものだと

信じ、余計な妄想とか心配は一切しないことにしている」ってところは、一番感心したところ。相手も人だし、完全に縛ることなんてできるはずないし、ありもしないことに悩むのも無駄なことで、相手にも迷惑。その最終決断が聞かれるまで、一切気にしないって決めるだけで、心が楽になるんじゃないかと思う。心が100%自分のものだと思ってるのがポイント。見て見ぬふりでも、耐えるでもなく、その間は自分だけしか見てないと思っていれば、常に前向きよね。

「本当に行き詰るまでは、互いに一人で悩めばいい」ってのは、共感どこ。しょせん自分の悩みは、自分にしか解決できないよ。相手を巻き込んでも、なんにもならない。苦しんで、苦しんで、自分の中で消化し、答えを見つける。それが人の成長にもつながるし、本来そんなもんだと思うから。第三者にアドバイスをもらおうと、周りは巻き込まず、結論は自分で、と思うよ。近づきつつも、心の距離を適度において、みなさん楽しい結婚生活を送ってください。

そもそも、結婚どころか相手もない段階でこんなことを考えているから、話にならんのよねとは自覚するところ。付き合ってから悩むところを、その前にシュミレーションして結論だしちゃうところがあり。でも、その悩み多き中でお互いの共存の仕方を、彼女の価値観を通して知ることができ、ちょっとは幅が広がった。やっぱり経験しなきゃ見えないこと多数なんだなと、あらためて感じたり。そして、また一つよけいな知識を仕入れ、ますます頭でっかちになっていくわけで。

窮地における活路の見出し方 (17.9.20)

「胡蝶の夢」から一文を紹介。幕府の海陸軍軍医総裁の地位にあった松本良順が、鳥羽・伏見の戦いで破れ江戸に引き返し良順から治療を受けていた新撰組総長近藤勇に尋ねた場面を文面から。

(良順)「医者として人殺しをするつもりはなかったが、敵に囲まれた時どのようにして活路を見出すのか」(近藤)「まあ、それは死ぬるのですな」とさりげなくいって、しばらく黙った。やげて、(近藤)「生きようという念が一分でもあつては、どうにもなりません。ふしぎなもので、死ぬ気になると、まわりの景色、つまり敵のむれのことですが、その虚が見えてきます。その虚へ突っ込むのです。なんのかんの言っても、その一事ですな」

近藤に請われて義兄弟の契りを結び明治後も生きて良順が、死ぬまで人に語った有名な話。生死の狭間で活路を見出してきた人物だけに、その言葉に生き方の真髓を見て取れる。自分が生き残ろうと保身や逃げ道を考えると、思考に迷いが生じ本質が見えなくなる。頭で考えるんじゃなく、覚悟を決めたら突き進む、状況に応じて柔軟に対応する、その心じゃないかと思う。

剣道をしていた者としても、この言葉に思うところがある。先に仕掛けたら返されるんじゃないかという弱気、迷いが勝負を決める。これに気付かず・・・と懐かしい思い出でもあるけど、全てに通じることだなど。作戦もちろん大事だけど、いざ舞台に立ったなら覚悟を決めて積極的に仕掛ける。優位な状況で相手を見極め、次の一手をうつ。

記憶に留めておきたい言葉である。

じいさん追悼録 (17.10.2)

当たり前だったものが、そうじゃなくなるってのは、どこか不思議な気分だ。そのことへの実感がわかないうちはいつもと変わらないが、直視したとき寂しさが溢れる。それが自分を形成する一部であるなら、なおさらのことだ。

9月30日午前12時5分、物心共に自分を支えてきてくれた祖父を亡くし、思う。

「もう少ししたらよくなるからな」と、2度の脳梗塞と出始めた痴呆で思うように動かない体をベッドに横たえ自分に言い聞かすように話していたのが、ほんの数ヶ月前。ますますやせ細り体に力が入らなくなっても、自宅がいいからと一生懸命頑張っていた。体力をなくしたところへの肺炎で、治療などなすすべなくただ時間との戦いとなった。

夜中にかかった何度目かの自宅からの電話、容態が急変したとの初めて聞くセリフに緊迫感がはしる。はやる気持ちをコントロールし病院へ向かう。昏睡状態の身に、僕の声は届いたのだろうか。

これで、生まれたときから一緒に過ごし、多感な時期の駆け込み寺だった祖父・祖母を失ったことになる。親に弱いとは見せず一定の距離を置き始めた中学時代から、一方的に甘え続けた存在で、家で過ごす大半をそこで過ごしたもの。多くの話をし、価値観をはじめなんでも意見をぶつけた間柄でもあった。

戦後国税庁に入庁、仕事の傍ら税理士の資格を取得し50代で独立、

70代後半まで現役を続け自分の事務所を構えていた祖父の生き方は、誇りであり尊敬するところ。大学受験時に一度だけ聞かれた事務所を継がないかとの言葉は、身内の後継を期待した願望だったろう。当時税理士という仕事にさして興味がなかった自分が、コンサルタントを目指しているというのも皮肉な話だ。

仕事後はじめた診断士の勉強を唯一話し相談したのも祖父だ。1次合格の知らせを真っ先に報告し、喜んでくれた顔を思い出す。祖父の協力なしにこの勉強は成り立たなかった。しばらく休養するということにも理解を示してくれた。生きていうちに合格の知らせを届けられなかったことがなによりも悔しい。

花輪が囲む庭を朝からゆっくり1周した。毎日祖父の帰りを待ち一緒にキャッチボールをした庭で、祖父の立ち位置からその景色を見る。10歳になる親戚の子供と当時の自分を重ね、可愛いもんだっだろうなと思ひ返す。小学6年時、身に付けたカーブを投げ、祖父が取り損ね顔に当てたのが、キャッチボールの最後だったな。

畑仕事に精を出し、季節ごとの野菜の収穫は手伝いの一つだった。夏のトマトを水で洗ってその場で食べたおいしさは、忘れることができない。久しぶりにじっくり見た庭で、ゴルフの練習をしていたネットがなくなり、時の流れも感じさせられた。27年間住み、多くの思い出のあるこの家に、最後までいれて幸せだったろう。

言葉をかけるとしたら、やはり「ありがとう」だろう。感謝しても、したりない。自分も大きな物を与えてきた自負はある。信頼してくれていたからこそ、周りのいうことは聞かなくても僕のいうことは聞い

てくれたものだ。

今更自分を責めても無意味と分かっているが、他にももっと何かできたのではと、頭をよぎる。よくなるからといった言葉を思い出し、むなしく眠る姿に悔しさを思う。人前で涙を見せるのは性分じゃないが、惜しまず流すのが大切な人への見送りのはなむけ。無理に涙を見せる気はなかったが、どうやらそういうものじゃないらしい。

24日に笑顔の写真を撮り、26日に寝顔を見た、29日18時に手を握り返したという話を聞いたその相手が、既にこの世に存在せず棺の中で静かに目をつむる姿に、人間の不思議さ、むなしさを思う。人一人がいなくなっても、世の中は何も変わらずただいつもと同じように時が流れる現実を。

自分ってのは、世の中に何の影響も与えず、時と共に人々の記憶からさえも消えるちっぽけな存在に過ぎない人間だから、自分の思うように生きていこうと思う。周りを気にし、見えない未来を案じて生きても何にもならない。その時がくるまで、ただ自分に素直に生き、静かに受け入れることとしよう。

最後に祖父と話したのは、9月24日入院先でのこと。敬老の日と2ヵ月後の誕生日を兼ねたプレゼントを持って訪ねた。プレゼントであるポーチの使いやすさをアピールするもいまいち反応が悪く残念。「まだ自分の誕生日プレゼントもらってないから、はよ退院してくれよ」なんていってると笑っていたな。笑顔が足りんとの言葉に答え、プレゼントと一緒に満面の笑みで写った写真は、今やいい思い出だ。

会話は聞き取れない言葉が多かったが、最後の最近ことによくいう

この言葉だけははっきりしていた。「はやく嫁をもらわんといけん」と。「こればかりは自分ひとりじゃどうにもならん、そんな難しいこといわれても困るんよ」と変わらず流したものの、自身の先を思うとやはり最後の心配はそこだったのかなと今更思う。

結婚？まあ、それは勘弁してくれ。なによりも最後の思いだから、ちょっと重いもの感じているけど、じゃあってなんにもしようがないから。それはさておき、まあ見てて、じいさん。これからの自分の生き様を。

「BMWのある生活」より (17.12.1)

いつかBMWに乗りたいな、密かに持っている儚い夢。ベンツのようないやしさがなく、トヨタのような軽さでもない。裏打ちされた技術と自信にあふれるシンプルなスタイル。いいものってのは、こういうものをさすんだと思う。

外に無駄に主張しない落ち着いた印象を持ち、内に自信にあふれる本物の能力・実力を持つ、必要な時にその能力を発揮し対応する、自分もそんな人物を目指したい。自分の目標をその姿に見出すから、どこか心の中で追いかけているところがあるのだろう。そんな中、ちょっと見かけた、BMWの広告。まさにその価値観を表したもので、そんな主張に心を打たれて、ここに紹介。

「人生に多くのものを求める人へ、BMW」
大人の哲学を持ち　子どものような純粹さを持つ人
主流なのに　心は反主流である人
スーツも着こなすが　ジーンズもはきこなす人
寡黙であるが　説得力のある人
人生も語れるが　ジョークもうまい人
有意義も好きだが　無意味も好きな人
ワインも詳しいが　恐竜にも詳しい人
常識は持っているが　決して縛られない人
ITには強いが　手紙は万年筆で書く人
家庭を愛しているが　時には家庭を忘れられる人
孤独も好きだが　社交も上手な人

ブランドは好きだが 依存はしない人
伝統は重んじるが 新しいことも好きな人
クラシックも聴くが ロックも愛している人
知性だけでなく 遊び心も持っている人
ゴルフだけでなく サッカーにも夢中になれる人
常に冷静だが 時には情熱的になれる人
剛胆であるが 細かな気遣いも大切にしている人
仕事には厳しいが 女性にはドアを開けてあげる人
自信はあっても 過信はしない人
美術館にも行くが ジムにも行く人
協調もできるが 反論もできる人
守るものが多くても 冒険できる人
お金は堅実ではあるが 使うときは大胆な人
現実主義者であるが 夢を忘れない人
上質にこだわるが 贅沢は好きじゃない人
都会も好きだが 誰もいない海が好きな人
毅然としているが 映画で泣ける人
自分の誕生日は忘れても 約束の時間は守る人

BMWを象徴するイメージ広告だと思う。その多くに共感し、ますます惚れてしまった最近の出来事です。

家族とは (18.2.11)

自分のために頑張るってのは、限界がある。嫌になったら、そこで止まることができるから。誰かのためってのは、どこまでも頑張れる。そこには止まることができない、明確な目的があるから。

人が生きるには目的が必要だし、それがあって人生が充実することは間違いない。自分のために生きるとは、仕事に、趣味に、その中心に自分があることだろう。そこではやりたいことをしているという充実感を得ることはできる。しかし、どこかで行き詰るような気がする。

人の精神は多かれ少なかれ波がある。精神的に落ち込んだ時もしくは追い込まれた時、それを支えるのは自分以外の存在に置くべきだと思う。自分というものは意外と脆い。そしてそれに頼り崩れた時、立ち直ることは容易ではない。自分はできるだけ外側に置いておく。それが自分自身の精神の安定にもつながるんじゃないかと思う。

結婚とは何なのか、家族とは何なのか、そんなことを考えながら、この答えにたどり着く。何のために人と暮らすのか、結婚に何のメリットがあるのか、8年前の20歳時分に大学そばの焼肉屋で出張で東京に来た親父にぶつけた疑問は、その価値を見出せない当時の本音。今もどこかにあるその思いを否定する気はないけど、それだけじゃないなと思うようになったのは、広がった価値観とすっかり弱くなった自分の心のおかげかな。

今の生きる目的は何なのかと考えた時、特に思うことはない。これ

が自分の一番の弱さだと、実感するのがここ最近。生活を質素に楽しむだけのお金は手にしているけど、ただそれだけ。生活に何の張りがあるわけでもなく、週に5日働き、週末ぶらぶら過ごして、1ヵ月後にまた収入を得る。ルーティン化したそんな日々の繰り返し。刺激がどうだとかいう気は既がない、ただ、心のよりどころがほしい、そんな気持ちだ。

ベターハーフの話はかつてにしたこと。パズルの1ピースが1つでは凸凹な不完全体であるように、人間はもともと不安定な存在。その欠けた部分にぴったりはまり、一緒にいることで不思議と気持ちを安定させるような相手が世の中にはいる。人生とは、そんな相手を探し、共に生きることが目的じゃないのかというもの。今でも共感するこの考えは、価値観の根底にあることだったりする。

自分が生きるために必要な存在。そんな存在を守り、思いやり、楽しみ、一緒に日々を歩むことができるなら、何にも変えがたい生きる目的になるのではないかと考える。仕事に、趣味にと、自分の帰るところ、心に安定があってこそ自由に羽ばたくことができるのではないかとも思う。

誰かのために生きることができるなら、それは素敵なことだと思う。そして、自分のために生きてくれる人がいたなら、何よりの励みになるだろう。そこに理屈はない、ただお互いが相手のためを思っただけの行動。家族とは、そんな存在じゃないかと、最近考える。そして、そんな家庭を作れる可能性を感じたなら、望んでその環境を求めたい。

いつか出会うだろうそんな人に僕はきつこう言うだろう、「これからの人生、君のために僕は生きたい」。そして、こう考える人と共

に生きたい。「あなたのために私も生きる」と。

あとがき

一人で生きることの自由も、限界も実感してきたここ数年。勢いで生きてきた20代半ばまでとはまた違う価値観が芽生えてきたのもまた事実。その環境が当然に与えられていたなら気にしないだろうことも、ないからこそその価値もよく見えてくる。家族に縛られず自由に生きていると飲み屋で高らかに叫ぶおじさんが、1週間の出張から帰ってご苦労様と何気に肩を揉んでくれる奥さんを引き合いに、それが自分の安らぎだと優しげな顔で語る姿にどこかほっとする。

そんな理由、そんな存在、いつもの君の妄想だといわれたらしょうがない。まあ、そんな存在に出会った時、なりふり構わず行動する自分があるわけでもないし、思いだけが先行しているのはいつものことかな。でも、変わってきた価値観を整理しておくことは一つの目的。物事の判断基準になるから。それが前向きな内容なら、全てをその方向に解釈できるようになる。

ご存知、思いつきで突っ走る瞬発系とは程遠い、一歩引いての熟慮型が自分の基本。考えているうちに頭の中でストーリーが完結し、行動せずじまいというのがいつものパターン。一般的な評価は知らんが、自分のこのもどかしさをこよなく愛しているから、まあ今後も付き合い合っただけかね。

勉強仲間への手紙（18.2.18）

出張で広島を訪ね、久々かつての診断士勉強仲間かつ現診断士の友人と夕食をとる。そこでの話の続きとあわせ、ここで返事を書く。

ますます仕事に活躍されているようで、なによりです。やっぱり、資格取得という結果をだされたからだと思いますよ。始められた年齢、環境を考えても、僕の4年なんて甘っちょろいと思うところです。

でも、つくづく思います、あの勉強していた頃が一番楽しかったんですよ。毎週広島に集まって、勉強状況を話して、新しい情報を教えあって、焼肉を食べに行き、2日かけの合宿に参加して、皆が同じ目標に向かい、ライバルであり仲間であったあの時期が。

大きくは試験合格を、小さくは毎週授業での小テストで結果を出すことを目標に、毎朝1時間、仕事が終わって3、4時間、週末図書館で7、8時間と勉強することが日常だった。全てを犠牲にしてを自認していた通り、飲み、遊びの誘いは全て断り、勉強に回していた。箸にも棒にも引かからなかった2次の勉強で、だんだん成績が上向き、紙面で発表される10位以内に名前が載るようになった頃の嬉しさを思い出します。

全てを勉強に費やせたのは、その目標に向かう意志の強さ。そして、そこに楽しさを感じたのは、仲間の存在だったと思っています。Kさんという知識面において目指す目標がいたことと、予備校全体の高いレベルが危機感を実感させ、足りない能力は努力（勉強時間）で補うと自分のスタンスを確立させたところです。試験1週間前から会社の

夏休みを利用し、広島に泊りこんで自習室で勉強するって経験は、もうないでしょうね。今考えても、よくやっていたなと感心するところです。

しばらく試験を離れて気付いたこと。勉強最優先であらゆる付き合いを断っていたから彼女ができないんだという言い訳が、思い込みであったこと。変わらない現状で実証済み。勉強をやめたらお金が貯まるだろうなどの思いが、単に思いに過ぎなかったことも。他の消費に代わっただけで、結果むしろマイナスに作用しているものです。まあ、現実はこのままですね。

今日は、近況も聞いてよかったです。マネジメントにおけるおすすめ本は、メールで送ったとおり、「霸王の家」司馬遼太郎、「リコー流売れる社員の現場力」神戸健二。リコーは、個人的には結構当たり本なんで、感想でも聞かせてください。

診断士取得後の動きは興味深いので、また話を聞かせてください。診断士自体も制度が変わることと、これまで試験制度の変更ばかりに目がいったことを考えると、いい流れじゃないかと思います。ただ、取得後の更新は大変になりますね。企業内診断士をどう救うのか、取得後放置している人と、実際の仕事で活かしている人を単なる診断実績だけで判断するのがいいのかどうかは疑問です。まだまだ過渡期の資格ですね、この資格の存在意義を残すため次々に改革が行われることを期待しているところです。なにせ、それが専門の人達の集まりのはずですからね。

新規事業展開の話の続きを。(この友人は、会社の企画部門の要職についており、業態の異なる新規事業に参入すべきか話題にのぼり)

僕の考えは、企業は長期利益を見越して投資をすべき。新規事業を開始するなら、じっくり育て会社の収益の柱とすべきだと思っています。流行の分野に参入し短期的な利益を得ることは、長期的にマイナスになる可能性が高いものです。馴染みのない分野で過剰な投資が必要となる、短期の参入・退出を繰り返すことでかかる心理的な負担等、原因は想像の通りです。

新規事業を考えるなら、現事業との相乗効果を第一に考えるべきじゃないでしょうか。現在の事業がしっかりとした柱だからこそ、それを活用するような分野への進出が現実的なのでしょう。現在の事業が、BtoBが主であることを考えると、toCへの需要の開拓が一つの方向性です。既存の事業は、プロダクトアウトという感じがし、市場ニーズを汲み取る弱さを感じます。一般市場を中心とする事業を持つことで、市場ニーズに柔軟に対応できる仕組みを確立でき、現在の事業にもプラスに作用することになるのではないのでしょうか。

全く異なる分野への進出におけるリスクは、社員のモチベーションにもあります。上に立つほど、社員の目線まで一度おける必要があると思います。多角化した企業の社員の方と話した時、その分野に携わるのに違和感を持つことが多いような気がします。仕事といえばそれまでですが、会社を愛しているからこそ受け入れられないとこもあるのではないのでしょうか。人的資源の活用こそ成功するため鍵とはご存知の通りです。

飲食業は、日銭の入る魅力的な事業かもしれませんが、激しい競争

がついてきます。競争があるということは、大きく勝つ可能性もありますが、同時に副業での参入は確率を大きく後退させます。提案された内容は、極端な例でいえばカラオケ店をあげることができます。カラオケというエンターテイメントをメインに、食事は冷凍食品等を提供する。飲食の投資をしない分、価格を大きく落とすことができます。周辺飲食店と比べ大幅に安い価格も、原価は2～3割程度、利益率が高い強みが残ることには魅力があります。そのため、カラオケ業界は食事の提供に大きな力を入れますが、現実には芳しくありません。せっかくの外食の機会は、安くて腹が満たせればいいという人より、それなりの値段でおいしいものを食べたいというニーズが高いからです。高付加価値の提供で高い利益率を得ようとするれば、高いエンターテイメント性と同時に差別化した食事の提供の両立は必須となります。高回転率で消耗戦をする気はないでしょうし、中途半端なポジションで埋もれることを避けようと思えば、その方向性になるのではないのでしょうか。どちらにしろ、大きな投資が必要になります。それなりのポジションでも成り立つのが飲食業ですが、異業種への新規事業参入となれば、それなりの結果も求められるでしょうから、リスク込みになるのは仕方ないと思いますよ。

個人的には、ブランドの活用に新たな道があると思っています。広島から全国に展開する知る人ぞ知る大きなブランドを持つ会社と認識していますが、庶民への浸透はどうでしょうか。背景を持つ会社は、一つのきっかけで飛躍します。老舗という堅実さ・実直さを全面にだし、一般市場向け商品開発、展開。安全・安心をうりに、ニーズのある商品に独自の付加価値を少し付け。ブランドという強みが、安心感

から盲目的な購買を促すことはご存知の通りです。パブリシティとして取り上げられるよう働きかけ、認知度が高まれば、全国的な展開が目指せます。

今ある資産の活用、まだまだ使い切っていないという印象があるので、新規事業の展開は相乗効果が見込める現在の事業からの派生を提案したいところです。

第3者の客観的意見もたまにはいいでしょ、ご参考までに。相変わらず彼女がいないのは、他に興味があるわけじゃなく、自信と意気地のなさによるものです。自信を持つ分野じゃ多少のことじゃ譲りませんが、ない分野じゃ話にならないほどの消極性を発揮します。一重に、ただそれだけの理由だったりします。

2年振りにお会いしたんでしょうか。変わらないこの関係が嬉しいところです。大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響く。自分はそんな感じの人間です。小さく叩く相手なら、自分で大きな音の鳴らし方を磨く努力をします。でも、所詮自分での音など限界があります。能力を引き出してもらって、次々に発想が生まれてくる、そんな瞬間を味わえるのは、相手がいてこそのことです。そんな人達が、あの6人の勉強仲間であり、あなたです。いろんな角度から、各々会社で抱えている問題の解決策を提案しあっていた居酒屋でのあの集まりは、異業種の知識と発想を勉強でき、貴重な財産でもあります。こういう人達が集まって、何か仕事ができたらおもしろいだろうなと思ったりします。(同時にあの個性的な集団がどこでお互い譲り合うのか疑問だったりしますが)

資格を取得した者、会社で上のポジションに移り仕事に専念していた者、本社に転勤していった者、会社を立ち上げた者、山口の片田舎でくすぶっている者、仲間達はその後それぞれの道を歩き始めていますが、同じ時を楽しみ、苦しんだ、あの時の仲間であることに違いはありません。また皆で近況を報告しあえる時がきたらいいですね。お忙しいとは思いますが、また気軽に声をかけさせてください。楽しい時をありがとうございました。

いじめへの対応を長々と (18.10.3)

北海道滝川市教育委員会の対応には、どうにも違和感を覚えてならない。昔から続くおかしい風潮の末期症状のような気がする。いったい何が問題なのか、少し掘り下げて考えてみる。

滝川市の小学校で自殺した、小学校6年生の女兒。そして、その自殺に対し、いじめはなかったとの見解を示した、滝川市教育委員会。いったいいじめとは、何を指すのか、まず、当初公表されなかった遺書をここに載せ、その状況を推察してみる。そして、その教育委員会の対応に対する文科相の考え、「いじめの有無については、いじめを受けたか、受けなかったかは子どもの受け止め方もあるし、客観的に見てどうかということもある」ということについても、ふれてみる。その遺書の内容を、まずは抜粋。

「学校みんなへ この手紙を読んでいるということは私が死んだと言うことでしょう。私は、この学校や生とのことがとてもいやになりました。それは、3年生のころからです。なぜか私の周りにだけ人がいないんです。5年生になって人から「キモイ」と言われてとてもつらくなりました。6年生になって私がチクリだったのか差べつされるようになりました。それがだんだんエスカレートしました。一時はおさまったのですが、周りの人が私をさけているような冷たいような気がしました。何度か自殺も考えました。でもこわくてできませんでした。でも今私はけっしんしました。(後略) 6年生のみんなへみんなは私のことがきらいでしたか？きもちわるかったですか？私は、みんなに冷たくされているような気がしました。それは、とても

悲しくて苦しくて、たえられませんでした。なので私は自殺を考えました。(後略)」※仮名遣いなどは原文のまま

いじめとは、何なのか。いじめとは、客観的に見てどうかということ、それぞれの受け止め方があるから、一概に判断できない、という文科相の判断に、現在の一般的な基準を見て取れる。そして、いじめの根本がなくなる原因を、ここに見る。

いじめとは、人間の本能に基づくもの。自分と違うもの、劣っていると判断するものを取り除こうとする、無意識の行動。軍隊の足並み揃えた行進に、チアリーディングの完璧な演技に気持ち良さを感じ、ちょっとした乱れに嫌悪感を覚え、真っ白なTシャツの小さな汚れを必死に取り除こうとするように、それは人間の本能的な感覚によること。

大人になれば、社会で多くの人々と共に生きていくために、それを自制する必要があることを学ぶ。元々人間が持っている感覚で、社会で生きていくために制御することが求められるもの、いじめ≒差別に対する自分の捉え方は、これに尽きる。その制御の方法は、社会での生き方を学ぶ学校生活で身につけること、これも以前から持つ考え。その教育課程での中途半端な対応の結果が、いつまでもなくならないいじめの現状で、一般社会でさえそれが当然のように起こっていることだと捉えている。

本来学ぶべき教育課程で徹底できなかった結果が、どのような弊害をもたらしたか。会社と言う直接社会生活と接している人々は、教育の成果ではなく、そこでの生活から身を持って学んでいるところが大

きい。かつての皆と深い付き合いが求められた地域社会構造が崩れた今、会社と言う規律ある社会から遠ざかっている者に、それを意識する機会は限りなく少ない。例えば、家庭に入った女性、会社内の人間としか接しない人、そういう人達同士の関係には、本能的な付き合い、嫌いな人を排除しようとする、いじめが起こりやすいのではないか。本来乗り越えるべき経験を経ずに来た結果、大人になっても残る、他者の排除。同一民族という同質性が当然に成り立つ環境だからこそ、それは見えにくく、そしてその根は深いと感じているところである。

行うべきは、教育課程での徹底的な指導。その意識を植え付けることにある。自分と異なる他者を尊重する、まずここにある。多民族国家なら、これなくして、国家の運営は成り立たない。姿形が異なることは当然で、だからこそ、意識してそれを認め合うことも、そこでの生き方を学ぶこともできる。同質だからこそ難しいとは、このこと。つい考え方まで同じものを求めてしまう。例えば、仏教ではない違う宗教に、どこか拒否反応を起こしてしまうこと。戦争解釈でもいい、皆が同じ方向を向かなければいけない今の風潮などがそれを表す。それぞれの価値観を認め合うという最低限のことさえ、社会全体が否定しているところを感じはしまいか。だからこそ求められる、その価値観を繰り返し教え込み、実践を通して身に付けさせる必要性を。

だめなもの、だめ。これに尽きる。だから、客観的に見てどうか、加害者・被害者それぞれの見方がある、という文科相の考え方には、違和感を覚える。そうじゃないはず。いじめってのは、単純に言えば、その定義は、セクハラと同じ。好きな人にされて嬉しいことを嫌な人にされること、なんて顔かされる方じゃなく、相手がされて嫌と感じ

るかどうか、という被害者の感覚にその判断を委ねる原則論の方。いじめも同じ。する方がどういう気持ちでしたというのは、何の言い訳にもならない。された方が、それをいじめと感じたなら、それはいじめ以外の何ものでもなく、ただ求められるのは、その行為をやめさせるための対応だけ。

状況を分析してなどというその中途半端な対応が、現状を生んでいるということ意識する必要がある。いじめがなかったという教育委員会ばかり、客観的に捉えた上でいじめの有無を検証する姿勢に、やるせなさを感じる。そして、その背景に、起きた結果に対する責任を求める、大人の事情があることが、何よりも情けない。求められるは、起きた結果に対する責任じゃなく、これから二度と同じ問題が起きないための対策のはず。

時に人格攻撃にまで及ぶ、マスコミ等による必要以上の責任追及を容認し、その後の対応に興味を示さない風潮は、同じ事件を繰り返す要因となっている。本来必要なのは、何なのか。マスコミの姿勢は、話題としては盛り上がっても、残念ながら社会生活には、なんのプラスにもならない。本末転倒とは、このこと。現場の混乱をもたらし、問題の本質をぼかすこととなる、方向性のずれた似非正義感、興味本位による介入なら、やめてもらいたい。現場に根ざしたその根絶を目指す取り組み、大きな力に振り回されずに、原点に立ち戻り最善の策をとることを求めたい。本質を求める米国民の対応は、日本と逆を行くから、機会があるなら意識して見てみてほしい。どうあるべきかを、考えさせられるはずである。

結局何が言いたいのか。いじめとは、被害者がそう感じるかどうかには尽きる。いじめられたと感じたなら、それはいじめであり、それをなくするための対応をとる必要がある。それは、教育機関への責任のなすりつけでも、加害者のつるし上げでもあってはならず、そう感じた原因を掘り下げ、なぜそれが起きたのかを皆で考え、同じことが二度と起きないように共通の意識を持たせることを第一とする。

いじめの根本は、異質なものの排除にあるから、異なる価値観を尊重することを絶対のものとする強い意識を持たせる教育を行う。実際に起きたいじめ、これまで他で起きた事例を取り上げ、擬似経験を積み、自身の価値観とするレベルまで持っていく。問題を、クラス、担任レベルでの解決に求めず、学校による説明を行い、その事例を学校全体、地域教育委員会を含めた共通認識とする。いじめを許さない価値観は、周りを巻き込んだ抑止効果を生み、例え起きても、見てみぬ振り、対応しない先生という現象を許さず、学校が率先して取り組む姿勢は、本人の訴えに頼る現状を変え、周りから積極的に防止を求める風潮を生むことになるだろう。

残念ながら、大人の社会こそ、いじめの問題が根深かったりする。いじめに対する価値観の低さを要因としつつ、それを解決する機関がないこと、途切れることのない人間関係が、問題を大きくする。無意識での行動が、被害者へのそれを認識するに至らず、より弱い対象である自分の子供への間接的な仕返し等極端な形で表れるまで、気付かずにいる事態となっている。

まず、その原因が、本来学ぶべき時期に身に付け損ねた価値観にあるということを認識する必要がある。社会全体で欠けていること、ま

ずそれを受け入れ、その後の世代に引き継がないための教育に取り組む。現代の価値観としても、浸透を図る。きれいごとじゃない、現実としてどうか。機会あるごとに報道等を通し、身近な話題で、具体的にありべき姿を示し、意識を変えていく必要があるだろう。

いじめられる方にも問題がある。よく聞かされるこの価値観が嫌いなのは、上記の考え方による。いじめる方に100%の原因がある、その意識なくして、何ができようか。

人間同士、合わない奴も、嫌いな奴もいる。それでも、この世じゃ共存して生きていかなきゃいけない。それを教える教育現場の現状はどうか。クラス皆と仲良くなる、そんなことを求めるからおかしくなる。合わない奴とは、適度な距離を置いて付き合うのが、現実社会だ。深く付き合おうとするから、人間関係がややこしくなるとは、持論。女性同士でのいじめが酷いのも、言わせてもらえば、これが原因。仲間を増やし、つるもうとするから、本来ならちょっとしたひずみですむことが、大きくなって問題となる（ただ、これは、言語に長けると同レベルで、女性の本能に起因すると思っているから、仲いい人2、3人をベースに、後は適当に付きあっときゃいいのよとは、言い切らないこととする）。

教育問題を扱うトップが、教育現場にいる人間が、それを監視する人達が、そのことに気付かない現状。これが最良の解決策かどうかは別にして、一つの答えだと確信している自分の考えが、検討事項にあげることは、これからはないのだから。責任だの何だの剥ぎ取り、子

供のこと、社会のあり方を考え、純粹に突き詰めたら、ここに至るんじゃないかと思うんだが。

まあ、長々と思うことを書いた。反発を覚える方も、いつものざれ言だなと軽く流していただければと思う。きっとそれが、他の価値観も認めると言うことにつながるのだから。

仕事を通じ会社の選び方を考える（19.6.10）

就職活動時には、自分のやりたいことができそうな環境、興味がある業界と会社の表面的な情報を基準に選んだことを思い出す。そこでは、未だやりたい分野に携われずにいるも、仕事の内容・重さには満足いくもので、なにより価値観を含め社内の環境が合い、楽しく仕事ができているのは、幸運とも言えるだろう。

働いてみると分かるが、結局仕事の内容というのは、どの分野も本質において大きな差はなく、やはり重要なのは会社の環境ではないかとの結論に至る。また、会社の環境とは、そこで働く人達が作り上げるものなので、短期間に大きく変わるものでもなく、組織の都合に左右される仕事の内容より、余程安定的な指標でもある。

満たされた人生を送るためには、日々の生活に必要な収入を得る必要があり、その最もシンプルで効率的な手段が働くことと言える。その意味でも、仕事とは、時間的にも精神的にも、人生に於いて大きなウェイトを占めるもので、だからこそ仕事への満足度の最大化は、一生を通じた課題ともいえる。

勢いで対応できる20代半ばまでという短期的な視点を変え、仕事を、生涯を通じ積み上げるものという長期的な視点でとらえた時、何を基準に会社を選ぶかは大きく変わってくる。知識・経験の習得という割り切った理由の就職でないなら、長期的な視点も取り入れ判断するのがいいだろう。

会社の環境＝社風とは、どこもそんなに違わないだろうとは、就職

情報等で間接的に触れた時の勝手な想像に過ぎない。学校のクラス内で自然にできたグループに、それぞれ特徴があるように、人の集まりである会社にも同様の特徴がある。周りの環境に良くも悪くも左右されるタイプなら、自分と価値観の合う上司や仲間のいる環境を第一に選択したい。

そうというのも、様々な会社を知れば知るほど、それぞれに違った企業風土があることを思い知らされるからである。接する一人の人間への判断で、会社全体を判断するのはどうかと言う気もするが、大概大きく外れない。その人物がトップに近いほど、その会社のあり方に近いことは確かだが、例え下の人間でも、会社というのは上の価値観が下まで浸透しているものだから、一人の人間を見れば、その会社の価値観を見ることができるというのが、感想。

業績に関わらず、常に前向きにチャレンジしている会社の上層部の人間からは、こちらが引き込まれるほどの熱い情熱といきいきした姿を見ることができる。そんな時は、思わず転職したくなる気にさせるから、魅力ある人間が上に立つ必要性をつくづく思い知らされる。そして、そんな会社は、一般の係員に至るまで表情は生き生きとしており、そこで受ける温かな心遣いに、できるならこんな会社で働きたいと思わせる。

一方、外部の人間に対しぞんざいな扱いをする会社というのは、確実に存在する。立場変わればという想像力さえあれば、なぜこんな失礼な態度が取れるのかと接触後に思うものだが、そういう会社は得てしてそこで働く人達にも同様の性質を見て取れる。そういう風土は、

子会社や関連会社にも波及しているから、おもしろいものだったりする。

外部からトップが来たり、中途採用で異なる血の入る機会の少ない会社では、その風土が変わる機会はほとんどない。新規採用者は、いつの間にかその風土に染まる、もしくはそれが合わずにやめることになる。そこに染まらず自分を持って仕事にまい進し、トップに立つことがあっても、それまでその環境で生きてきた社員の意識を変えることは、そう簡単にはいかないだろう。

規模の大小を問わず、やはり人間的に尊敬に値する人物は、確実に存在する。そんな人達が集う組織で、できるなら働きたいと思う。そういう環境は、自分を同様のレベル以上に引き上げてくれるから。一定レベルの給与水準は、もちろん求めたい。与えられる権限や責任の度合いは、モチベーションにつながるので大事にしたい。そして、それと同レベルで、社内の環境も重要な要素として考えたい。

会社とは、そこにいる人達だけのそれぞれの価値観の集合体。それを皆でどの方向に持っていこうとしているのか、それを見極めることが求められる。その一端は、そこに属する者なら誰でもかもし出しているもので、それは一つの判断材料になるだろう。

就職活動中に、どれほどその機会があるのだろうか。そう思うと、OB訪問なりそこで働いている人のつてをたどって雰囲気を知るのには、意味のあることだなと思ったりする。山口県にさして帰る気もなく、あまり真剣に企業を探さなかったこともあり、就職活動当時はほとんど知ることがなかったが、県内にも様々に多くの企業が存在し、

そこには、光り輝く魅力ある企業が数多く存在する。そういう現状を伝えたくも、伝えられない現実に少々の葛藤を覚えつつ、さわりだけでも触れてみたところである。

行政システムのあり方を検討（19.7.16）

社保庁の業務怠慢振りは、どこをどう切り取って見ても、常識的には考えられない、腹立たしいものである。組織の解体という、相変わらずの場当たりの政府の対処に、これまで同様、国の機関のあり方になんら変化が起きないだろうと諦めているところである。

遡ればきりが無いが、ごく最近で思い起こされるのは、談合事件に端を発した、防衛施設庁解体、そして、同じく談合事件により廃止が決まった農水省所管の独立行政法人緑資源機構。どれも、政府により、世間的なパフォーマンスとして組織の解体を行ったものだが、機関のあり方自体の見直しに一切着手していないため、繰り返された今回の問題発覚で、結局、問題の本質が何も変わっていないということが、よく分かる。

緑資源機構廃止の際にも提言したが、結局、国家公務員として働く人間が、どこを向いて働いているかということに、尽きるだろう。国家的な事業の執行機関である中央省庁及び地方にある出先機関は、直接国民と接する機会、限りなく少ない。出先機関は中央省庁の方向を見、中央省庁は政府もしくは国家という名の自ら描いた幻想、つまり実際に国民の存在しない上方向ばかりを見ているような気がしてならない。

国家運営とは、どこまでいってもその根底に国民の利益が求められる。常に意識する必要があるのは、国民に対し説明を行い、民主的な賛同を得られるかどうか。国民より委託された資金により、国民のために何ができるのか、それぞれ求められる必要な分野に、より効果的

にどのような投資や対応ができるのか、現在の状況は、本来求められるべき視点の欠如を感じずにはいられない。

行政とは、サービスである。民間企業との違いは、資金提供者が全国民・法人に渡ること、その中で一定の公平さを持って全方位を認識し、長期的な視点で、サービスを提供していく必要がある。現在のような問題が国機関で頻繁に起きるのは、国民に対するサービス提供機関であるという認識の欠如。企業なら、株主や消費者から、地方自治体なら、国機関や住民から、ある程度その認識を自覚させられる機会がある中、国機関においては、チェック機関が存在しないため、野ざらしになっている現状を想像できる。

モラルの低下は、法に触れない部分でも、様々な面で現れてきている。公務員制度改革の中央省庁の抵抗もその一つであろうし、起きた問題に対し、全省庁であらためて問題を浮き彫りにし、組織自体の見直しを行おうという流れにならないことにも見ることができる。セクショナリズムと言われる旧式の縦割り組織が当然のように存在し、省庁間のまとまりはなく、表面化した問題を一省庁の部署単位の責任で切り捨てる点も、その結果によるのだろう。

この問題の改善策は、旧来から言われてきた方法に尽きるだろう。
①省庁間の異動の実施。キャリア制度による採用時からのコース別人事を行う必要性は検討の余地があるが、まずは、現制度の維持を前提とし話を進める。専門的な知識が求められる仕事については、ノンキャリアと言われる2種採用職員が担い、省庁間の異動を行わず、部署間の異動も3年以上を単位とし、スペシャリストを養成する。1種採用のキャリア官僚については、省庁を問わない一括採用を実施し、所

属を内閣府なりに置き、自由な異動を実施。仕事の内容により、1年から3年以内の異動を行い、ゼネラリストを養成する。

キャリアには、従来通り全体を把握し指揮・命令を行う監督的な地位と権限を与え、一方責任を明確にする仕組みとする。問題の把握如何に関わらず、起きた結果に対する責任を求めることで、組織に緊張感が生まれ、リーダーシップの発揮が期待できる。また、定期的な人事評価で部署のトップを担えないと見なされた者は、専門的な仕事を行うノンキャリアと同様の待遇とし、扱う。一方、組織のリーダーとして能力があるノンキャリアをキャリア組みの扱いとする、キャリアの変更が制度として可能な仕組みとする。

キャリア制度の維持権限の所在(内閣府・人事院なり)を明確にし、その基盤となる公平・公正・透明性の高い評価制度を実施する。採用区分によるキャリア制度とは名目上で、実質能力に応じた人員配置を行うことを目標とする。

所属省庁を明確に定め、そこでの評価が全てであることが、本来国家のために働くべき役割を放棄させることにつながっている。責任が明確でない地位への短期間での異動も、組織の緊張感をそぎ、変化を行えない要因となっている。本来短期的な人員異動のメリットは、常に様々な視点で、物事を見直す機会があることであるはずなのに、現在は、個人のキャリア形成ばかりが先行し、組織として求められる役割を担えていない実態。結局は、国民のための制度と言う視点が欠けていることにあると、見る。

キャリア官僚には、現場を見る機会を与えることも必要だろう。将来機関のトップに立つ人間として、どのような役割が求められている

かを考えれば、それまでに経験すべきこと、人材の選び方は、自然と答えが見えてくると思うのだが。

②チェック体制の確立。とかく、国の仕事は、国民の目に触れる機会が少ない。報道発表がマスコミを通じ伝わる程度で、外からのチェック体制は、ほぼ皆無に等しい。国会の審議状況をほぼ国民が把握することが困難なことを考えると、国機関へのチェック体制は、なんらかの形で行う必要がある。どんな組織にしる、外部からのチェック実施は、モラルの維持に必要なこと。方法としては、省庁とは完全に独立した内閣府に直属する独立機関の設置、犯罪事項の告発とは異なる、内部からの問題点提案機会の確立も考えられる。

本来の目的は、公務員の能力を最大限発揮できる環境の提供。当然に作られるべきそれが、政治的問題や中央省庁に占める既得権益を持つキャリア官僚により阻まれてきたのが、繰り返される問題の本質。過度の監視は、働く者のモチベーションの低下につながり、チェックされる機会があると言う意識を持たせるレベルに留めることが、必要。既に与えられた者のため、制度の保持を優先した結果生まれた、実質的なキャリアを積めない形骸化した現在のキャリア制度は、新たに来る者に魅力を感じさせず、優秀な人材の採用を困難にもしている。採用から、退職までのキャリア形成を念頭に、対外的に理解が得られ、働く者の能力を発揮できる仕組みを作り直すことが求められるだろう。

一般国家公務員より大幅に優遇された待遇である現在のキャリア制度は、法により認められたものではないと言う。言わば、受益者が、

制約を受けることなく、自ら作り上げたシステム。そのあり方については、外部から検討する必要がある。

優秀な人材確保、採用後の人材活用を大義名分とするこの制度も、詳細に至るとその必要性に疑問を抱く点が多くある。

早期に退職し、天下り先で2重・3重の退職金を得なければ、求める人材が本当に集まらないのか。そんなことを目指してキャリア官僚になる人間に、どんな仕事ができるのか。キャリア官僚レベルの人間が就職先として選択するだろう大企業レベルと同様の待遇確保の必要性はどこまであるのか。民間企業で行われる、50代での部長職就任、50代半ばでの退職金をもらっての子会社や本社役員への就任、定年後の子会社社長への就任という流れ。民間にいたなら得られる待遇の確保を目指し、裏で作り上げた仕組み。

人材の確保には、競合する企業と同レベルの待遇を確保することは、必要条件。自身の現状を省みず、自分が得られないだろう他人の待遇をうらやみ、感情で批判する無用は、認識している。国家を運営する機関に必要な人材のあり方を国民レベルで認識し、育成・活用の方法を議論する必要があるだろう。

行政のコスト削減は、どの世でも問われてきた。必要以上の給与削減等待遇の悪化が招いた人的レベルの低下が、権力の横暴や賄賂の横行を生んだという歴史。日本のシステム維持の根幹を成す信頼できる公務員の存在。周囲の環境や教育のあり方の変化により、誰に対しても一定のレベル以上が期待できた一律の倫理観の保持が期待ができない今、求められる人材確保は、表現以上に重要なものになっているのかもしれない。

必要な待遇は、正規のシステムとして確保したらいい。2重の退職金という、無駄なシステムを導入する必要はないが、国民的の合意の上、見直す余地がある。また、定年まで働くシステムを作り、子会社に類する公益法人・関連団体の不必要な設立を認めない制度も、求められるところである。

完全な仕組みができあがるまで、導入を行わないというのは、行政機関において、多くの面で見られる傾向である。まず、可能なところから導入し、問題点を見直しながら、より良いシステムに変えていくという方法の転換が求められる。

人材の活用とは、行政に限らず、企業においても様々な模索が行われてきたところである。完全なものがないからこそ、未だその模索は繰り返されている。かつてはやされた松下電器の事業部制組織が、時代の変化と共に自らの手により転換が行われ、いち早く成果主義を導入したキャノンは、その弊害から制度を廃止した。それぞれの企業が、答えを見出せないまま、自社に適する制度を試みている。完全な制度など、最初から求める必要はない。自社の形態に応じ、望ましい制度を、常に探し続けられればいだけ。変化を恐れず、より良いものを求める姿勢こそ、求められるところだろう。

LOVE LETTER (20.2.23)

自分の中で結論を出していた、一つの思いがある。一人で生きるには、限界がある。それでも、人に合わせて生きるタイプじゃない。自分と合う人がいないなら、一人で生きていこうという思い。多くのことに価値観を持ちながら、無理に押し通すことも、安易に妥協することもない自分に、それを素直に受け入れてくれる人以外共に過ごすことは難しいとの考えから。

安易に妥協する気のない自分に、半ば諦めていたそんな存在との出会い。思わぬ偶然だったのか、定められていた必然だったのか、縁とは不思議なものだとつくづく思う。

共にいることで、心が安定し、満たされるときを過ごせる、自分の一部として欠くことのできない存在。時に現れる複雑な内面は、その笑顔により打ち消され、ちょっとした落ち込みは、聞き役に徹する君に吸収され、頑張りとは心から励まされ、喜びは数倍の喜びへと変わる。僕の価値観に耳を傾け、僕の思いに喜んで付き合ってくれる。人と生きることが、これほど楽しいものなのか、片時も手放したくないと思わせる。

環境とは二人で作上げるものだから、今持つ思いを大事にして、お互いが何かを与えられる存在として、これからもお互いを想いながら、楽しくやっっていこうよ。